

はじめに

今回は人間はなぜ教育を必要としたのかについて考えてみよう。教育は「学び」と「教え」の二つの営為から成る。その両方にそれぞれ学びたい、教えたいという意味が存在している。

人間はなぜ学びたいと思うのか。それは学ぶことによってその人間の次の人生がその人にとってたぶんよりよいものになるはずだ、という希望が学びたいという気持ちを引き起こすのである。「学びたい」を英語に訳してみよう。I want to learn. でも訳すのか。want を辞書でひいてみよう。名詞だと欠乏、不足といった意味が出てくるだろう。学びたい要求が潜在的にあると言おうとき、「学びのニーズがある」といふ。need もまた「困窮」とか「貧困」という意味がある。英語の歌の歌詞によく I want you, I need you... じつごフローズが出てくるが、これは自分に you の存在が欠けている、ということの意味になっている。

希望と欠乏が学びの意欲を喚起するというのはまずは鉄則だと言っている。希望を失った人間は学ぶ意欲を持たないし、欠乏感のない人間もまた学ぼうとはしない。後は強いられて勉強させられるということがあるが、それは苦痛になっているにちがいない。現代の学校教育でも学ぶ意欲を失っている子どもや生徒たちはこのいずれか、もしくは両方に問題を抱えていると言ってもいいだろう。つまり、自分の未来に希望を描けないか、いろいろなものを与えられずおきているか、じつごフローズである。「この鉄則をつまぐ活用することで教育効果を高めることが可能である」ことを心に留めておいてほしい。現代では子どもたちに学びにおいて希望、欠乏、必要といったものがあるだろうか。現代の教育では当然のことのようにになっているのかもしれないが、学び喜びというのはどれだけ実感を持って存在しているのか。検証しなくてはならぬだろう。The want ないし need のありようについて日本の教育の歴史から見よう。

一 学びの要求

平安時代に生まれた文学で著名なのは『源氏物語』であろうか。源氏物語について中村真一郎は次のように書いている。

『源氏物語』は好色の書である、淫書である、として近世以来、道徳家たちの非難を浴びて来た。

明治になってからも、当時の国文学界の指導者であり、西欧的な教育を受けた芳賀矢一博士のような人から、このような淫猥な作品を、日本文学の代表であるとしなければ成らぬのはざんねんだ、というような声を聞くのである(『国文学史十講』)。

中村真一郎『色好みの構造』岩波新書 一四頁

しかし、『源氏物語』に描かれた世界は実際の平安文化を映し出したものであった。

「あの物語は当時の読者には、彼等の生きた一条帝頃の宮廷生活を扱った風俗小説とし

て、つまり実生活の反映、さらには多くのゴシップや醜聞の集積として、争い読まれたに相違ないのである。「色好みの構造」一五頁）と考えていいのだろう。それはわれわれが現代の恋愛小説や、やや破天荒な物語を読んだとしても、そこにはあり得る現実が描かれていると思うし、そのように自分を主人公に投影しつつ読むであろう。それは多少の誇張はあったとしても文化のありようを描写したものである。先述の芳賀矢一身も「併しながら、その当時の筆で、何しろ大部の物語故、その時分の有様は明に分りますから、歴史をやる人も、語学をやる人にも、大切な好古の材料になるので研究する必要がありますのでございます。」「と位置づけられている（『国文学史十講』）。

そうした平安期の文化を中村は「色好み」という言葉で象徴しているが、「色好み」は現代的にはマイナスイメージが強いので、「恋愛」と置き換えていい。即ち、恋愛はこの時代の貴族たちの文化そのものであったのである。「恋愛」は時代によってその姿を変えているので、ここに現代に生きている自分の恋愛観を持ち込んではいけない。史実として平安貴族は恋愛という文化の中に生きていたことをまずは理解してほしい。平安時代の恋愛文化はまったく現代のそれとは異なっているのだ。

昔、をとこありけり。恨むる人を恨みて

鳥の子を十つゝ十は重ぬとも思はぬ人をおもふものは

といへりければ、

朝露は消えのこりてもありぬべし誰かこの世を頼みはつべし

又、をとこ、

吹く風にこそこの桜は散らずともあな頼みがた人のこころは

又、女、返し、

行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

又、をとこ、

行く水と過ぐるよはひと散る花といづれ待ててふことを聞くらむ

あだくらべかたみにしけるをとこ女の、忍びありきしけることなるべし

（『伊勢物語』五十段）

この時代において恋愛というのは知的ゲームであった。もちろん恋愛は男女の間で行われるものであるから、学びは男だけではなく女にも必要なことであった。まず仮名文字が開発され、その学習が必要となり、さらに和歌を詠む技法を身につけなければならなかった。

まずは仮名を一字一字覚えるために「はなちがき」の手本が必要になってくる。その最初の手本と思われるのが「天地の詞」である（仲新『近代教科書の成立』八頁）。

あめ（天） つち（土） ほし（星） そら（空） やま（山） かは（川）
みね（峯） たに（谷） くも（雲） きり（霧） むろ（室） こけ（苔）
ひと（人） いぬ（犬） うへ（上） すゑ（末） ゆわ（硫黄） さる（猿）
おふせよ（生育せよ） えのえを（榎の枝を） なれぬて（馴れ居て）

※榎はア行の「え」、枝はヤ行の「え」

有名なのは「いろは歌」であるが、もう少し遅くこちらは平安後期に作られたものといわれる。

いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ うゑのおくやま
けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす

いずれもすべての仮名文字（四七、四八）を使用して、全体意味をなしている。この仮名を覚えたら、和歌の書き方を学ぶ。これには次の歌が使われた。

難波津に咲くやこの花冬こもり今を春べと咲くやこの花

あさか山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは

こちらは和歌を書くときの「つづげがき」の手本（教材・教科書）となるものであった。

二 往来物の登場

まがりなりに支配の権力ができあがり組織化されると、官僚制が確立してくる。官僚というものは国家権力にとっては欠かせない存在であり、官僚機構は国家権力を機能させる重要な仕組みである。ここにおいて権力側からすれば教える必要性が登場してくる。

大化の改新以降朝廷の中で組織的な教育が行われるようになった。そして大宝律令で学令二十二ヶ条が定められ、都に大学寮、諸国に国学を置くということが定められた。そして試験によって人材の抜擢が行われるという制度ができた。しかし、平安時代に入り、官職の世襲制が強まってくると大学寮のの制度は存在理由を失っていった。組織的な教育はそれを支える学びの欲望によって支えられるということだ。

とは言え、官僚制が整ってくと文字による情報の伝達・組織管理ということが必要になってくる。重要なのは文書の作り方である。

情報伝達の文書とはどのようなものであるかと言えば、まずは手紙であろう。手紙＝書簡によって情報の伝達が行われるのであるから、正しい手紙を書く雛形が必要となる。そこで書簡を綴じて手本とすることがはじめられた。それが往来物の成立である。往来とは行き来、すなわち手紙のやりとりを意味する。

まずは平安後期に『明衡往来』というものが作られた。これはもともと藤原明衡によって編纂された『雲州消息』というものが原型になっているのでそのように呼ばれている。消息というのは頼りのことであり、手紙文を意味する。往来もまた手紙のやりとりという意味であり、『雲州消息』には二〇九通の手紙の文例が納められていた。このようにして平安から鎌倉といった往来物と呼ばれる教材が登場した。これらを古往来と言い、五〇種以上が見つかっている。

近世になり、寺子屋が普及するようになって新しい往来物が出てくる。たとえば『農業往来』『商売往来』『夫婦往来』等々がある。それらは必ずしも書簡の形式ではなく、手習いの手本であった。いずれにしても手紙というのは文字利用の基本であり、文字を必要とする人間にとってはまず知っておきたいものであった。それゆえに手紙だけでなくまずは学習者の want なり、need なりを満たすものであるから「往来物」と呼ばれたのである。

三 藩校と寺子屋

近代以前の組織的な教育とえば、藩校と寺子屋を挙げることが一般的である。江戸時代は身分社会であったから身分に応じた教育が用意されていたということになるが、ここでも学びの欲望が重要な意味を持つ。

安定した官僚社会であった幕藩体制下では武士が読み書きをするのは官職を世襲するための最低の条件であった。身分社会とは安定的に後継者が供給されて成り立つ社会である。武士の家では男子については父親がそうした読み書きと基本的な素読を教えるのが普通であった。素読とは『論語』ならば『論語』を徹底的に暗誦させるというものである。これは基本的に武家に生まれた者の基本的な素養と考えられていた。そして、一定の基礎学力が身につくと個人的に儒学者のところに学びに行くのが常であった。

徳川家康は慶長一〇（一六〇五）年に林羅山を雇い、お抱えの儒者とした。林羅山は三代家光の支援によって寛永七（一六三〇）年に上野忍岡に林家の家塾を開いた。以後諸藩でもそれぞれお抱えの儒学者（藩儒）を持つようになる。そして彼等に家塾を開かせることも少なくはなかったし、儒者たちが私塾を開いて藩士たちを門弟に取ることもしばしばあった。

やがて藩主たちはお抱えの儒者を教授として藩校を開設するようになった。

藩校の設立状況は左のようになる。

◇全国的傾向でいえば

宝暦から天明（一七五一～一七八九）約四〇年間）に五〇校の設置。

寛政から文政（一七八九～一八三〇）約四〇年間）に八七校と最も多く設置。

※寛政二（一七九〇） 寛政異学の禁↓昌平坂学問所の設立

天保から慶応（一八三〇～一八六八）約四〇年間）にも五〇校設置。

最終的に二五五校の設置。

◇九州地方では

宝暦から天明↓十五校

※宝暦四年に熊本時習館

寛政から文政↓十一校

天保から慶応↓二校

このように藩校が作られていった理由は、諸藩が置かれていた外交、内政上の理由があった。それと幕府の動向の影響や幕末の混乱など、藩政が危機を迎えると藩校のニーズが高まる。つまり、藩士の育成が課題となったのだ。これを「時務の意識」という。

一方、庶民はもとより学びの必要性を誰からも要求されてはいなかったが、近世後期（十七世紀末、十八世紀初頭元禄頃）から手習いの要求が高まり、寺子屋が増大した。寺子屋というのは俗にわれわれがそう呼んでいる名称であり、当時はそうは呼んでいなかった。おそらくは「手習ひに行く」と言っていたのだらう。とは言え、ここでは馴れた言い方として寺子屋と呼んでおこう。

『日本教育史資料』（明治十六年調査）掲載の寺子屋開業数によると文政頃から増え始め、天保期から急増する。これは報告され、記録の残っている数字なので実際にはもっと多いはずである。

開業数はおおよそ次のような状況だった。

文政（一八一八～一八二九）	六七六
天保（一八三〇～一八四三）	一九八四
弘化～嘉永（一八四四～五三）	二三九八
安政～慶応（一八五三～六七）	四二九三
明治一～八（一八六八～七五）	一〇三五

寺子屋が幕末に急増した理由は幕藩体制が揺らぎ始め文字というものが庶民の生活に必要な力として認めざるを得なくなってきたことによる、といえよう特に商業資本の台頭に伴う商品経済の発展がそうした傾向に拍車を書けたのである。商品経済が発展し、商業が盛んになってくるとまず商業の現場で契約書・帳簿・手紙のやり取りが行われるようになってくるし、そうすると商人になるためには文字を知らなければならなくなってくる。それは商人ばかりではなく農村においても米以外の商品作物がつくられるようになってくると経済行為は農民にまでおよぶようになってくるのである。

第二に幕府や藩が文書による統治を進めたことがあげられる。文書による支配は一元的・画一的支配を可能とするので上層農民が文字を知ることが常識となってきたのである。

第三に文字は本来支配階層の文化を構成するものであった。漢詩はもちろん和歌や俳句などは武士以上の人々によって嗜まれた趣味であったが、庶民が社会的に台頭してくるとそうした文化を自らも享受することで身分的拘束から退避することができたのである。そうした文化的サークルは生得的な身分よりも力量がものをいい、より力量のすぐれたものが高い名声を得ることができたのである。現在でも確たる勢力を持つ芸事における家元制などもこうした封建体制の文化的崩壊過程に歩調を合わせて確立されたのである。

いずれにせよ文字というものはもとより支配階層が特権的に握った情報的手段であり、文字イコール力^{ちから}であった。それが封建体制が崩れ始めるに従って民衆が自らのものにしていく過程が寺子屋の発達にあらわれているのである。いわば寺子屋は民衆が力を獲得していく社会的闘争であったといえるのかも知れない。但し、民衆が身分制を解体しようとしていたのではなく、上昇志向とでもいうべき動機づけによって文字学習に取り組んだのであって、その意味では常に文字を獲得した階層と獲得しようとする階層の間に闘争があったと考えることもできる。

寺子屋の発達は必ずしも時代の波とともに順風満帆に成長したのではない。庶民はたとえ社会的に力量をつけたとしても弱いものである。だから寺子屋の開業数・廃業数は庶民の生活事情と関連して増減している。例えば飢饉などが起これば開業数は減少し、米価高騰などの経済事情によっても寺子屋の開業数に影響が出てきたのである。

四 学びと教え

以上、近代以前の学びと教えのあり方から教育の思想について考えてみた。まず「学び」の出發は平安時代の貴族でも近世の庶民であっても、そこに流れているのは自分の

よりよい生き方のために学ぼうとしたということである。貴族は恋愛の技法として読み書きや歌の作法を学び、庶民は文化的ステータスのステップアップのために学びの場を得ようとした。学びとは欲望によって支えられているものであったと言える。そのために学びは常に個人の私的な問題として位置づけられていた。林家の家塾しかり、諸藩の藩儒の位置づけにしてもそうであった。それを学校として再編されたのは教えとしての教育が幕府や藩といった権力にとって支配の〈知〉が必要になったからである。支配の〈知〉は権力の危機感によって昌平坂学問所であるとか、各藩校であるとかが設立されるようになったし、幕末維新期の藩校はまさにそのようなものとして登場し、近代に引き継がれるパトスを内包していた。

ここには書かなかったが、庶民の教化のために藩のお墨付きを貰った郷校なども権力の支配の〈知〉に位置付くものであった。

【参考文献】

石川松太郎『藩校と寺子屋』教育社 一九七八

【課題一】 人間はなぜ学ぼうとするのか

【課題二】 学校が必要となったのはなぜだろうか

【課題三】 学習意欲のない子どもにはどういう処方がいいのだろう